

大妻女大 家政

○小島 章子

渡辺 雄二

青木 宏

(目的) 戦後の高度経済成長の中で食生活と共に飲酒習慣も大きく変化し、飲酒量も増加の一途にある。中でも若年層の飲酒率の増加は教育、健康、社会問題としても指摘されている。本研究では、高校生の飲酒行動の実態、および飲酒に対するイメージを中心に高校生の飲酒行動を検討した。

(方法) 東京都内の高校生計604名(男子250名、女子354名)、比較群として都内に勤務する20～50代の社会人計191名(男性101名、女性90名)を調査対象とした。調査は質問紙による無記名式で行い、内容は飲酒状況、飲酒に対するイメージをSD法により測定した。調査時期は1992年7～9月であった。イメージは49の形容詞対を用い、評価は5段階とし、分析は共通性の推定値を重相関の二乗(SMC)として因子分析を行った。固有値1.0以上で因子を抽出しバリマックス回転を行った。

(結果) 因子分析の結果、高校生では3因子が抽出され、累計寄与率は39.0%であった。高校生の第1因子は「不快な-快適な」「価値のない-価値のある」「きらい-好き」等の項目に代表される評価性の因子、第2因子は「繊細な-大胆な」「静的な-動的な」「閉鎖的な-開放的な」に代表される活動性の因子、第3因子は「だらしない-きちんとした」「乱暴な-ていねいな」等に代表される道徳性の因子と解釈、命名した。これらの因子について飲酒頻度別に因子得点を比較してみると飲酒をしない群(ND群)と週1回以上飲酒している群(FD群)では3因子についていずれもFD群の因子得点が有意に高く、FD群とND群では因子の解釈が異なることが明らかになった。